

高校における英文読解の授業プロセスと発話の検討 ： ビリーフと指導法の関連に焦点を当てて

著者	野村 幸代
学位授与年月日	2016-10-19
URL	http://doi.org/10.15083/00075371

論文の内容の要旨

論文題目：高校における英文読解の授業プロセスと発話の検討

ービリーフと指導法の関連に焦点を当ててー

氏名：野村 幸代

本論文は、英文読解授業の多様性と、教師のビリーフが指導法に及ぼす影響を検討することを目的とし、同一高校に勤務する3人の英語教師を対象として、教師のビリーフと授業展開や構成、教師と生徒の発話を検討した。検討課題は(1) 英文読解授業の指導の多様性とはどのようなものであるか、(2) 英文読解授業における教師と生徒の相互作用の多様性とはどのようなものであるかである。5部9章で構成されており、第I部では研究の目的と方法について論じ、第II部では教師のビリーフを検討した。第III部では英文読解授業の多様性を、教師のビリーフと授業展開及び授業構成から検討し、第IV部では教師と生徒の相互作用の多様性を、教師のビリーフと教師と生徒の発話から検討した。第V部では本論文の総括を行った。

第I部第1章では、教師のビリーフ研究の領域において、授業分析に基づいたビリーフの検討が求められていることを展望した。また、本論文の基礎となっている「言語教師のビリーフ」、「読解プロセスモデル」、「教師と生徒の相互作用」という概念を整理した。第I部第2章では、研究課題と分析方法を述べた。授業分析は(1) 教師のビリーフとの関連性、(2) 英文読解指導の展開と構成、(3) 教師と生徒の相互作用という異なる視点から行うことを述べ、それぞれに適した分析方法について整理を行った。

第II部第3章では、教師の英文読解指導に関するビリーフと、生徒との相互作用に関するビリーフを教師へのインタビューの演繹的分析により検討した。その結果、英文読解指導に関しては、経験の長い教師は、生徒の英語習熟レベルや生徒が持っている一般的知識を考慮に入れて指導を行うというビリーフを持っていることが示された。また、「言語習得は習慣形成である」というビリーフ(以下、「技術ベース」と、「言語習得には文の内部構造を知的に理解することが必要である」というビリーフ(以下、「規則ベース」)を持った教師がいることが明らかになった。また、生徒の視点から学習内容を考える「生徒の学びと理解に関するビリーフ」を重視するタイプと、教科の特性を重視する「教科に関するビ

リーフ」を重視するタイプの教師がいることが示された。教師と生徒との相互作用に関するビリーフでは、生徒の視点から生徒への接し方を考えるが、生徒を集団として捉えるビリーフと、生徒一人一人に関心を持つビリーフと、自分の教師としての経験に基づいて生徒と接するビリーフを持っている教師がいることが示された。

第Ⅲ部第4章では、本調査のために開発した読解プロセス単位を用いて、3人の教師による同一内容を扱った授業展開を分析し、その特徴を教師のビリーフとの関連性から論じた。分析の結果、授業という集団の読みにおいても読解プロセスモデルが展開されているが、その展開パターンは教師によって異なっていることが示された。その相違を詳細に検討するため、第5章では第4章と同じ授業を、読解プロセス単位の構成比率から検討した。構成比率を見ると、どの授業も単語に関する発話が30%前後を占めており、低次レベル技能（単語、文法、文）に関する発話が全体の70%以上を占めていた。授業展開と授業構成の相違点を教師のビリーフとの関連性から検討した結果、「規則ベース」のビリーフを持つ教師は、音声と文字を結びつける音読指導と文脈に即した単語指導を行い、テキストの意味を丁寧に扱う際には低次レベル技能の指導を重視していた。一方、「技術ベース」のビリーフを持つ教師は、新出単語の意味をトレーニングのように指導していた。また、「生徒の学びと理解に関するビリーフ」を重視している教師は、まず生徒に和訳させることにより生徒の理解度を把握し、その後、文法指導を行っていた。さらに、テキスト内容の深い理解を得させるため、生徒にテキストに関する文脈的知識を提供したり、テキスト内容を生徒の経験と結びつけたりしていた。一方、「教科に関するビリーフ」を重視している教師はテキストベースの理解の促進を図っており、文法に関する発話比率が高かった。第Ⅲ部第6章では、第4章と第5章の分析結果の信頼性を高めるため、3人の教師の他の授業を同様の方法で分析し、同じ傾向が指摘できることを検証した。また、読解プロセスモデルは本来、読み手の理解モデルであるため、生徒の発話に即した授業分析を行った。その結果、生徒の発話に即した授業展開と授業構成は授業全体の特徴と一致した傾向が見られるが、完全に一致しているわけではないことが示された。以上、第Ⅲ部では、同一内容を扱った同じ英語習熟レベルの学習者を対象とした授業の展開や構成の多様性と、教師のビリーフとの関連性を論じた。

第Ⅳ部第7章では、教師間の発話機能の差異を検討した。その結果、「規則ベース」で、生徒の視点から生徒への接し方を考えるが、生徒を集団として捉えるビリーフを持っている教師は、生徒の知識を増加させるための「説明、講義」という発話機能の比率が高く、「強

い説明講義型」の授業を行っていた。また、「規則ベース」で、生徒一人一人に関心を持つビリーフを持っている教師は、「説明、講義」が多いものの、授業において生徒の発話を重視しているため、生徒の発話を引き出す「質問」や「制限応答誘発のためのことば、応答を助けることば」の比率も高く、「弱い説明講義型」の授業を行っていた。「技術ベース」と「規則ベース」を併せ持ち、自分の教師としての経験に基づいて生徒と接するビリーフを持っている教師は、「説明、講義」の比率が高く、生徒に訓練としての応答を求める「質問」と、生徒に指示を出す「教室管理、授業運営上の言葉」も高かった。また、授業において英語の使用を重視するビリーフを明言していた教師の英語使用率は高かった。第IV部第8章では、生徒の発話に基づいて、教師のビリーフが生徒の学習行為に及ぼす影響を検討した。生徒の発話機能に関しては、すべての授業において「選択応答」の比率が高かったが、それ以外では相違点が見られた。「規則ベース」で、生徒の視点から生徒への接し方を考えるが、生徒を集団として捉えるビリーフを持っている教師の授業では、教師が生徒の知識を増加させるために高度な「質問」を行っており、その結果「沈黙」の比率が高かった。また、「規則ベース」で、生徒一人一人に関心を持つビリーフを持っている教師の授業では、生徒の「自発的発話」が見られた。また「沈黙」の比率も高かったが、逐語記録から、生徒が率直に自己表現できる環境にあるがゆえに生じる「沈黙」であることが推察された。「技術ベース」と「規則ベース」を併せ持ち、自分の教師としての経験に基づいて生徒と接するビリーフを持っている教師の授業における生徒の発話機能は主に「選択応答」と「制限応答」であった。逐語記録から、教師の「質問」に生徒が短い応答を行っていることが明らかになった。生徒の発話内容に関しては、「規則ベース」で、生徒の視点から生徒への接し方を考えるが、生徒を集団として捉えるビリーフを持っている教師の授業では、テキスト内容に関する発話の比率が高かった。この教師はテキスト内容を重視するビリーフを持っており、生徒の発話内容にもそのビリーフの影響が推察された。また普遍的な事柄に関する発話も見られた。この教師は、生徒が持つ一般的な知識を把握しており、授業では一般教養に属する内容も扱われたため、生徒の発話内容にもその影響が見られた。「規則ベース」で、生徒一人一人に関心を持つビリーフを持っている教師の授業では、テキスト内容に関する発話や文法に関する発話が見られた。この教師は、テキスト内容や構文を重視するビリーフを持っていた。また、生徒の発話には生徒の個人的な経験や、生徒が教室のメンバーの一人として教師や級友と関わる発話が見られた。「技術ベース」と「規則ベース」を併せ持ち、自分の教師としての経験に基づいて生徒と接するビリーフを持つ

ている教師の授業では、単語と文法に関する発話の比率が高かった。また、この教師はテキスト内容も重視しているため、テキスト内容に関わる発話も見られた。第 8 章では、教師のビリーフが生徒の発話機能や発話内容に影響を及ぼしていることが示された。以上、第IV部では、教師の発話機能、英語使用率、生徒の発話機能や発話内容の多様性と教師のビリーフとの関連性を論じた。

第 V 部第 9 章では、本論文から得られた知見を整理し、本論文の意義と今後の課題を述べた。英語教育学研究における意義は、教師のビリーフが英文読解授業に及ぼす影響を授業分析により具体的に示すことができたこと、そして教師のビリーフと生徒の学習行為との関連性を示したこと、そして認知心理学における読解プロセスモデルが、英文読解授業においても展開されていることを授業分析により示したことである。教授学的示唆は、教師のビリーフと英語の授業の複雑さとの関連性を事例分析により検討したことにより、教師が自分のビリーフや自分の授業実践と比較するための具体例を提示することができたことである。今後の課題として、教師のビリーフと授業との関連性においては (1) テキスト内容の筆記再生テストなどを用いた教師のビリーフの生徒の学びへの影響の検証、(2) 事例研究の蓄積、(3) 生徒の英語習熟レベルの違いによる教師のビリーフや英文読解授業の特徴の検討、(4) 教師のビリーフと一致しない指導法が行われる理由の分析を挙げた。本研究の方法論的課題として (1) 授業における環境的要因を取り入れた、読解プロセス単位を用いた授業分析方法を開発すること、(2) 読解プロセス単位の「音読」の定義の厳密化を挙げた。また、日本の高校の英文読解授業における課題として (1) 生徒の発話比率を増加させるための教授法の開発、(2) 生徒の応答内容の高度化、(3) 英語による低次レベル技能の指導を行った場合の生徒の理解度の検討を挙げた。